

アムリタの淫濁

運動をすれば、身^み嗜^{たし}みは乱れていく。

殊^{こと}に、酷使され汗ばむ肉体自体のことともなれば、尚^{なお}更^{さら}だ。

その尿道孔も、死闘の興奮で、今にも開き切りそうになっていた。

突如現れた害敵を排除しようと、宇宙船の内部でアサルトユニット式の戦闘舞踏を演じていた褐色^{ラニー}の少女の持ち物だ。

下半身の激しい躍動により幾度も潰された赤い粘膜の縦坑が、やや楕円形に歪んだ入り口を、ぼつかり、と解放させ、疲労と緊張に昂^{たか}ぶらせている。荒々しく呼吸するかのよう

に熱気を吐き出させ、股着の暗闇の中で灼々と息づかせていたことだ。

その周辺部位は、彼女の着用した、過剰なまでに肢体とフィットしている伸縮性のコスチューム――下着^{インナー}一体型のフル・ボディースーツの股間と擦^{こす}れ続けてきたことで、艶めかしく汗ばんだ膺^{よう}前庭を、まるで性交の真つ最中であるかのようにさらけ出してしまっていた。

ココア色の秘丘から捲^{めく}れ広がる、鮮烈な鴉^{とき}色の粘膜だ。そこと押しくら饅頭し合ってきたボディースーツは、マスタード・イエロー^(暗めの黄色)。加えて、秘所のデルタ地帯から胸部にかけて

が肌着と一体化され、サフラン・イエロー^(明るい黄色)のレオタードを被^{かぶ}せたようなカラーリングと共に厚くなっている。その鼠蹊^{そけい}部の間では、人体の限界に挑戦するような無理な機動や脚の

使い方の度に、官能的な衝突が起きていたのだった。

急ターンを行う少女が、左右の太腿が入れ違いになりそうな強引なステップを踏めば、陰阜^{うね}の畝^{うね}が造山活動の如く褶曲^{しゅうきよく}し、振^{よじ}れ合う。敵の攻撃を躲^{かわ}す為に変則的な後方倒立回転を決めてみせれば、ピンと前後に伸ばされ、百八十度以上に開脚された両脚は、突っ張ったスーツと愛くるしい肉体の船底部とがペッティング――頬を擦^{なす}り付け合ってしまった原因であった。更には、推進ユニットを使って吹き抜けの天井から床へ一気に飛び降りた際の瞬間的なGで、それらが纏^{まと}めて圧潰される。

それはまるで、割れかけのアケビの果実をパック詰めにして勢いよく振り回しているかのようなだった。汗と脂を潤滑油にして抉^くじ開けられた大陰唇、小陰唇が、若い血潮^{たぎ}の滾る果肉の秘園を内側から押し出すようにし、スーツへ密着。グズツとデ IPP・キスをさせている。

そこに、侵犯者がある。

――ギチュ……。

奇怪な蚯蚓^{みみず}であった。

極彩色にギラギラと輝く、虹色の環形動物だ。つるりとした無毛の胴体を蠕動^{ぜんどう}させ、透明だが毒々しい甘臭を放つ粘液を表皮から分泌させている。頭部からやや降った所には、体節がどす黒く変色して膨らんだ環帯が有り、それはチョーカーのように胴体を飾って、不気味なアクセントを付けていた。

——ズッ、ギヌブ……ッ。

常軌を逸したことに、その蚯蚓は、スーツの材質を『泳いで』いた。

ナノマシンと、レアメタル製の金属繊維を織り込んだ、人類圏最高のコンバット・ボデイスーツ。単体での宇宙空間活動にすら耐え、如何なるウイルス・細菌の侵蝕をも許さない、文明の到達極致的な防御力を誇る。その生地は、まるで悪い冗談か何かのように、ズップリ、と身を潜り込ませているのだった。

一番近い光景は、水っぽい泥に指を突き入れている所だろうか。その『指』である蚯蚓が移動した後には、あたかも元の位置に軟泥が流れ込んだかの如く、ボデイスーツの生地に破損等の痕跡が全く残っていない。

しかも、更に理解に苦しむことに、スーツ生地は蚯蚓胴体との接合点だけは、ガムの膜が引っ付くかのように癒着し、侵犯者が一度身を引いたのに合わせて引っ張られ、尿道孔周辺に TENT を張っているのだった。スペクターの壁抜けじみた融合透過能力には、物質的抵抗が無い訳では無いらしい。ズズッ、と蚯蚓が横に動く際に癒着部位も船の航跡の如く付き従ってずれていくのだが、その速度は砂を掻き分けるようで重たげだ。

——ヂュジ……ビヂチッ。

蠕蟲の目標は明らかに、気忙しげに喘ぐ小振りな尿道孔だった。真つ暗な TENT の内側で、縦裂火口の如きラビアの谷へと頭部が近づいていく。蚯蚓の太さはヒメミミズ程度。すらりと細い。先端の口前葉が熱気を発する奥地へ降り立ち、膣前庭にヌラリと粘液を塗りつける。

しゅつ、と怪しげな液体が揮発し、穢れない朱鷺色の粘膜が、悍ましい媚薬成分を吸収させられる化学的な灼熱感に戦った。決して知ってはならぬ危険な快楽の予感。若く瑞々しい湿地帯が動揺し、拒絶に身悶える。ヒクッヒクンッ、と、弾けるような痙攣が、珊瑚を平たく押し潰したようなコーラルピンクの肉苑を劈いた。じんわりと浸透してくる得体の知れない高温の疼きに、悲鳴の波を打たせたことだ。

それを尻目に、虹色の陵辱者は、極細の面相筆で人形に睫毛を描き入れていくが如き小刻みな接吻を繰り返す。そうして初な膣前庭を廻りつつ、目当ての物の位置を探っていく。

……はたして、これは本当に蚯蚓なのだろうか？ 今、その薄皮が先端から、ペろりと蜜柑の皮をお尻から放射状に剥くかのように、ゆっくり捲れ、中身の赤く生々しいざらついた舌のような肉質を露わにしたことだ。円錐形の尖端が探査を繰り返し、ついに見つけた尿道孔の可憐な縁を、艶やかに、くるりと、なぞってくるのだった。

美孔を彩る快感のパルス。蟻の這うようなむず痒さが、恥辱に震える排尿管をひたひたと逆流してくる。その不穏な気配に、少女の腰の奥が、ぞわり、と栗立った。

焦燥感を煽られ熱く湿っていく粘膜の隧道だ。それでも貞節さを保とうと腹筋が堅く締められ、膀胱への昏い暗闇へと落ち込んでいく小さな小さな朱い縁の輪が、押し入って来たなら絞め殺して自決の道連れにしてやると言わんばかりの決然とした面持ちで、ひくひく、と戦慄している。綿棒で塞がれてしまいそうな脆弱な部位ながらも、拒絶の意を噴き

上げるアグニの小穴なのだ。

そんな潔癖な獲物に凌辱の魔指を掛けた蚯蚓触手の、露出した舐肉が、いよいよ生意気な巢穴を屈服させようと潜り込んでしようとし――、

「んうつ！」

そこで漸く四肢の拘束から脱したマハ・アディーニは、それまでの不快感を叩きつけ、不屈き者を一気呵成にチャクラムで両断しようとした。

「破廉恥！」

途端、それまでの緩慢な動きからは想像もつかない、ひゅつ、とした俊敏な動きで怪蚯蚓が退く。やはり、直前まで『泳いで』いたボディスーツの部分には、痕跡が全く認められなかった。

「おうおう、反抗的で可愛いよう！ まだ鬼ごっこがしたいのかい？ 細っこいあんよを見せつきたいのかい？ 活きのいいのが乗っていて、アチキも嬉しいんだよう！」

ケラケラと哄笑が上がり、死闘の舞台に、圧倒的な存在感が振り撒かれた。嘲弄の主は、グラマーな異星の美女だ。但し、上半身のみ。下半身は無機物と有機物の融合した奇怪な浮遊塊になっていて、その頂点から裸体の上半身――臍から上を生やしていることだ。

裸とは言っても、丸腰ではない。浮遊塊の部分は、臓物製の巨大なドラゴンフルーツが北半球を虹色の鉱石に置き換えたような、パニックSFのクリーチャーじみた異様であったし、頭上と両脇には生体型の兵装が浮かんでいて、生半可な防衛機構など寄せ付けない凶悪な戦闘力を示していた。それは二匹の巨大なワームが頭上で蝶々結びにされ、先端の頭部がよくしなる棍棒となつて周囲を殴打する近接兵装と、女性が和服の袂の中に手を引っ込めたような形状で、袖口に当たる穿孔から生体砲弾を撃ち出す、砲袖とも呼ぶべき遠距離兵装だ。

更に悪いことに、周囲には彼女の攻撃で産まれた肉溜まりが点在していて、特に量の多い所では、灯籠の如き形状と大きさの肉塔が生成されている。それらはミニmam・ジャミング・トーチカと分類出来そうな機能を有し、トラクタービームに酷似した力場を放つて周囲の獲物を捕らえようとしてくるのだった。

先程、マハに不覚を取らせたのは、これだ。交戦圏を一般人達のいる場所から遠ざけようと、必要以上に攻め掛け敵を釣ろうとした結果、行動妨害インスタント・トーチカの効果範囲に踏み込み過ぎて動きを止められてしまい、エイリアンが手元の射出機から撃ち出したバイオワイヤー――蚯蚓型の触手――に尿道を狙われてしまったのである。

「だけど、お気をつけよう！ 優しい優しいペヂュランズユ様が『指』を引いてあげなかったら、切られて痛くて暴れた先っぽが、お前の綺麗な『お庭』を突き破っちゃったかもしれないよう！」

（正気と引き換えなら、それぐらい！）

古来より、あらゆる犯罪と戦ってきた特捜機関、『プラナーズツティ』（サオールエ・ナティラーニー）の二つ名を持ち、実働チーム内では切り込み隊長とも

遊撃手とも目される軽快なフットワークで、至近距離まで詰められてしまった間合いを突き離そうとしながら、マハは眉を怒らせて淫惨な現場を目の端に映した。

（マハが、どうナタテ、この人達は助けて見せマス！）

ここは聖アマリタ学園の保有する豪華宇宙客船「アマリタの乙女」の内部、無憂樹の生い茂る、桃色の花崗岩で内装の統一された、女性用の大浴場だ。ちよつとしたグラウンド程の空間を与えられている、女生徒達の憩いの場であった。

三日前、このエイリアンの襲撃を受ける前までは。

本来なら、一日の学課を終えた彼女達が身を清めつつ、お喋りの花を咲かせていたであろう、この時間。だがしかし、今では、襲撃者の魔手に囚われた褐色の裸身達が、大きく腿を広げて一糸纏わぬ姿で嘆き悶える、淫らの湯園と化していた。濃淡取り取りのココア肌を誇る美少女達が、爛れた自流行為へと追いやられているのだった。

――ゆぎにいいいっ！ ろめんらいっ ろめんりやらひいいいいいっ！！

――ふああ……あ……ッ……はああアアッ！！ くオ……オ……ホおおおッッ！！

――イイッ、イイッ、イイイイッ！！ っ！ はひっ！！ ひ……ひうう……え、ひううっ……っ！！ ヒ……きひ……許ひて……もう許ひてええええっ！！

バスタオルを巻いて入浴中だった少女が、湯船に沈ませた両腕で何かを激しく掻き筆りながら、火照り切った顔を床と一続きの大浴槽の縁から投げ出し、はだけた豊かな胸を滑らかな直角の岩縁へと押しつけて官能に絶息させている。脱衣所で半脱ぎだった所を引き摺り込まれた少女が、粘液に塗れた衣服の袖をロープのように使って股間を擦り立てては狂おしく泣き叫ぶ。全てが悶え、自慰に悩乱していた。

哀れな虜囚らの股間にうっすらと萌ゆる手入れの行き届いた叢。その下の尿道口には、例外なく、一匹の奇怪な蚯蚓が頭を潜り込ませていることだ。先程、マハの排泄孔に押し入ろうとしたのと、万年筆程度の長さで独立行動をしている以外は、同種の個体である。そこから分泌塗布される、人類には抗いようもない媚薬粘液によって、腰をグズグズに蕩かし墮とされているのだった。

――ろうっ、してええええッッ、あしよこと指つ、離れないらああああ……っ！！

――だれ、か……っ、たしゅ……くだら、らあい……止めへええ……わら、狂っひや……

……ハア、ん、あ、あは、は、あ、ああ……ンヒッ！

――しゅごっつ、ひのおおおっつ！！ ひも、ろおっ！ ひもちっ、いいよおおお！！

そこかしこから甘く悲痛な嬌声が湧き起こり、湿度の高い暖かな岩室にくぐもって響く。殆どが、大胆な『双掌オナニー』だ。両手を前から被せられた女陰が興奮に充血し切り、湯気を立てて悦楽の雌叫びを上げ続けている。選りすぐりの赤粒達が双掌の下でヌラヌラと跳ね狂い、十指を突き込まれた真つ赤なアショカの花弁がクパクパと喜悦に喘ぐ。

――ムッチョムッチョ、ズミッ、モムンモムムッ、デュグルルッ！！

激しく上下する指の隙間、そこから見え隠れする蚯蚓達が、可憐な泌尿器を制圧した勝利に沸き立ち、あたかも尿道を犯すかの如く淫首を振って狂騒を煽っていくことだ。

——フウウウ……ツツ、汚い、のよつ、蟲なんて……！ 拔けな、さつ、抜け……ツ……ひ、嫌つ、嫌あああつつ!! あ、あ、あ、クル……つ、気持ち悪いっおそそ燃えちゃう気持ち悪いっおそそ燃えちゃうっつ、ためにやりよにひいひいッツツ?!!

——お母様あ、お赦しを……つ、お母様ああ……つ！ お小水の穴、処女を奪われて……っ！ わらくひ、もうコレと結婚いたしますう入籍いたしますうう!! ……うふ、うふふッ、もつと……もつろおお、めちやつ、目茶苦茶にしてへえええええ!!

——降ろうしてええええええつつ!! ここからっここからッツ!! イキイイイ!? イキイイイイッキイイイッキイイイイッツ! イキイ————イイイ————ツツツ!!!

たった一匹の蚯蚓によって、人間としての尊厳を全てかなぐり捨てさせられている。

「この淫魔! なんダテこんなことするデス!」

「決まってるよう! お前等が可愛くって大切だからだよ! だから、宇宙中に通用するように、このペデュランズ様が品種改良してあげるんだよ! 地球発祥人種はアチキの美意識にしっくり来るんだよ! それを他の奴らにも分からせてやるよう! 沢山芸を覚えさせたら、きつときつと大人気になるんだよ!」

「邪悪……!!」

憤怒が喉の奥から絞り出されたのも、当然であった。

無悪意の暴力に晒され、未来に花開くべきアムリタの乙女達が肉欲に墮とされていく様の、痛ましさ。今にも手を差し延べたくなるのを懸命に堪えて、マハ・アディーニは異星人との対峙を続けなければならない。

この船は実践的教育を旨とする聖アムリタ学園が、航宙カリキュラムに使用する御用船であった。宇宙進出時代の成熟期に入った人類の、更なる飛躍と繁栄に必要な経験や知識を得る為、母校を離れた一年間のクルーズ上で、宇宙船に関する種々の教習を通常授業と並行して受ける。船体は、良家の子女の集う名門女学園の「顔」に相応しい、華やかかつ斬新な設計で、これを用いた航宙研修はパンフレットの売りの一つでもあった。

その途上、古くは地球の周回軌道に設置され、初代から数えて五代目の現在では、主要銀河同士を繋ぐ中継銀河の一宙域から人類生存圏の平穏を守る、『古き讃歌』の本拠地ステーション『天の眼(アースマニー・アーク)』を社会見学し、そして次の目的地へと出発した直後に、ペデュランズと名乗るこのエイリアンに襲われてしまったのである。

「お嬢様達の研修旅行に、アチキが課外講習をプレゼントしたげるよう! 性調育だよ! アへ顔耐久レッスンに、オナニー指導! お前も観念して受けて行けよう!」

「マハは、この船を守る最後の砦! 決して暴力邪淫には屈しません!!」

彼女の他にも保安要員は、女性教師に女性警備員、女性船員と、女学園の特性上同性を揃えつつ、十分に配置されていた。しかし今では、前触れも無く突如船内に湧き出し、あらゆる防護を融合貫通してきた異星生物の大量によって、完全に制圧されてしまっている。鍛えようのない繊細な泌尿器に未知の催淫粘液を分泌する頭部をねじ込まれ、そこから迸

る灼熱の快樂によって全員が獣^{けだもの}じみた懊悶^{はげ}の渦中に叩き落とされているのだった。船内の至^{いた}る処^{ところ}で、使命感に満ちていた筈^{はず}の美肢^{みし}らが自慰行為に転がりのたくり、悔恨と呪いの嬌声^{うごめ}を吐きながら卑猥^{うごめ}に蠢^{うごめ}いている。

残ったのは、次の目的地までという取り決めでステーションから乗り込み、警護に当たっていたマハだけだ。怪蚯蚓^{かいしゅう}からの機器への侵蝕融合によって宇宙船のコントロールすら乗っ取られつつある今、彼女が抵抗を止め^やたら、このアムリタの園が暗黒の支配下に置かれてしまうのは、火を見るよりも明らかだった。

「ギャーツハツハハツツ！ ぼっち宣言来たよう！ 悲壮感に浸^{ひた}って楽しいかい？ 詰^詰んでる癖に負けるのを先延ばしにして、頑張ってるつもりなのかい？ いいよいいよう、まだまだ遊んであげるようつ、アチキは愛するペットと戯^{たわむ}れるのが大好きな、心の広おおいブリーダーさんだからねえ！ なんだってなんだって、時間はたっぷりあるんだからねえええつつつ!!」

「いいえ！ 救難信号、出しました!! いずれ仲間が駆けつけてくれマスつつ。モトモ、その前に貴女、倒しマス!!」

狂乱状態にある学生達の意識に、せめても届かせようと、殊更に声を張り上げる特捜戦士。

鹿の眼のようにぱつちりとした円^{つぶ}らな瞳を、敵に向けて凜^{みは}と睜^{みは}らせた、小柄な少女だ。深い緑色の髪に、褐色の肌。人種間の統合が進んだ現在では無意味な区分けとなるが、祖を辿れば印系ということになるか。年の頃は、十代半ば。大人びた蓄^{つぼみ}といった趣^{おもむき}である。スーツの内部に目を向ければ、伸び盛りの手足には真夏の草木のような生命力が満ち、コア色の肌には瑞々しい正義感が漲^{みなぎ}っている。衣装越しにも投射される、その清澄な存在感^{あはれ}は、このような淫欲の埒^{らち}塙^{はたけ}と化した大浴場の只中^{ただちゅう}にあつてさえ、翳^{かげ}ることがない。

いかにも、潔癖な尿道口の持ち主に相応しい少女だった。

「ギシッ、大口叩くねえ！ そんなんで守る相手を騙^{だま}していいのかい？ 期待だけ持たせて裏切るなんて、縛り首もんじゃないのかい？ だいたい、お前等の技術じゃあ、慣性航行の宇宙船に追いつくのだって、ことだろうよう？」

「はい！ 見括^{みくび}らないで下さい！ 通常なら七日間、マハの仲間なら五日間。既に三日三晩^{トリ・ウィークラマ}。航路変更も超三界航法も出来ないヨにエンジン^{トリ・ウィークラマ}は区画ごとマハが吹飛^{フット}ばしてあげましたからねっ、このまま進むしか無い以上、余裕デス！」

警備に当たっていた意地と責任があるのだ。エイリアンが再び手元からバイオワイヤーを射出してくるのを、小刻みなステップで躲しながら、じりじりと間合いを取っていくマハである。

濃いアベンチュリン（インド翡翠^{ひすい}）が一度液体として蕩^{とろ}けてから柔らかく固まることで産み落とされたかのような、光沢の綺羅めいた生氣^{はつらつ}澁刺^{はつらつ}とした翠髪^{すい}が、天然のスパンコールとなつて軽快な輝きを撒^{こぼ}き零^{こぼ}した。それは、鶉^{うずら}の卵のような可愛らしい頭に沿って綺麗に撫で付けられ、真ん中から左右に振り分けられている。そして、うなじで纏められ背

中に細長く垂らされ、水流の如き垂髪となつて、ステップの度に左右に振れることだ。

瞳の瞬きも、きびきびとしていて、それだけで不浄邪悪を討ち払うよう。更には、神秘的な光を宿した翡翠の色をしていた。その長い睫毛と蔓草つるくさのように細くしなる眉の上、眉間のアージュナー・チャクラの位置には、陽光の如き黄色のビンディが、シンプルな点形で施ほどこされている。

「ギャハ！ 進路に知らない恒星が無いといいねえ！ とんでもないことしかしてくれて、お仕置きは覚悟しておきなよう！ 一から推進部を造るんじゃあ、材料も燃料もかつかつじゃないかよう！ そんなにアチキと宇宙漂流したいんなら、付き合つてあげるよう！」

「いざとナタラ、マハが押して動かしますから、平気デス！ 今の内、投降しなさい。応援が来たら、詰むの、そちらデス！」

啖呵たんかを切つた弾みでチャリツと音を立てたのは、金鎖造りのマタパッティを始めとする絢爛な髪飾り達だつた。

一際、目を惹くのは、ビンディの上、前立ての如く額の前方に浮遊している、太陽のシンボルだ。黄金に耀く円盤の縁から、湾曲したナイフのような光葉が放射状に伸びている。それを浮かせているマタパッティとは、三叉に分かれた細い金の鎖で、振り分け髪の中央の分け目や、側面の生え際に沿わせて被せていく、鎖のキャップ帽といった風情のヘツドアクセサリーだ。あたかも、若緑の草原に黄金の河を流していくかのようなのである。

三叉の分岐点は、額髪の中央――振り分けの始まりに有り、同時にそこは、小さな蓮はすの白花が夏の朝駆けの陽光を浴びて咲き開く様を模した念動端子になっている。その白蓮端子が本人のサイコネシスを増幅させた特殊な力場を発生させることで、太陽のシンボルを浮遊させているのだつた。同種の力場がマタパッティ全体からも発せられていて、頭部を球形に覆い、宇宙服のヘルメット代わりにもなっている。

「怖い怖いねえ！ 気に入つたよう！ お前は特に念入りに可愛がつてやるよう！ 自分から時間制限まで作つて煽つてくるだなんて、健気けなげで燃えるじゃないかよう！！ 早くこつちへおいでようっ！ 待ちきれないようっ！」

「お断り！」

強姦魔の猫撫で声に顔を顰しかめながら、マハは、戦術電算機にもなっている太陽のシンボルが力場をスクリーンにして各種計測データや室内状況などを投影してくるのを、時折眼で追いつつ、得意の距離まで一気に間合いを引き離す機を窺うかがっている。

おそらく戦艦の対空機銃的な位置づけで、よりアグレッシブな役割があるのだろう。生物的にうねるバイオワイヤーの細い鞭が、間一髪で躲していくマハの周囲を執拗しつように踊り狂う。数本などは引き戻される際に、転がっていたバスチェアを巻き掴つかんで後頭部を殴ろうとしてくるのだつた。それを、身を伏せてやり過ぐす。両腕を脇に下げ、母鳥が卵を温めるかのような体勢だ。風呂椅子に付着していた、美少女達のヒップから滴った湯分が、ピツ、ピツ、と撒き散らされる中、穢れを知らぬ伸びやかな褐色の肢体が、山猫のように背

を丸め、音も無く次の行動へ移ろうとしている。

（それだけでなく、未知の生物相手に接近戦は危険——）

緊張と躍動の汗で薄く輝く額の、生え際から上型に分かれたマタパッティの細鎖は、しつとりと地肌に吸い付き、激しい運動の最中（さなか）にあってもなかなかずれないようだった。

そうやって卵形の頭部の曲面に沿い、その形の良さを忠実に引き立たせるのだ。

優美に山を描く中央の鎖は、旋毛（つむじ）を通して翠（みどり）の垂髪の根元まで降ると、そこを束ねている鈍金色の筒型の髪留めへと繋がっている。左右の細鎖は一旦、下りカーブを描いて耳の上を通り、そこから弧を描いて上がると、後頭部の水瓶的な美しさを示すかのように折り巻かれ、中央細鎖の途中と留め金（クラスプ）で連結されていた。

（チームのフオロー、無くタテ、この額の太陽で正義を照らし出してみせマス！）

気負った背中を流れ落ちていく一条の垂髪は、その翠糸を、鈍い黄金に煌めく筒型の髪留めへと委ね（ゆだね）ている。根元を、きゅっ、と絞り上げられ、水瓶から祭盆へ注がれる浄水の如き流麗な弓なりのアーチを曳（ひ）いていた。本人の動きに機敏に反応してくねる翡翠の小滝は、その形を維持する為に、根元から先にも複数の別の筒留めを、破線のように断続的に嵌（は）めている。それらは、縦に割った半面が筒状、もう半面は、上下の端に指輪を嵌めたかのような、二つの平行なリングで閉じただけの、開放的な構造だ。出来るだけ内側の翠髪（のぞ）が覗くように、という工夫だった。

向きは少しずつずらされていて、左手側に筒が来る位置から、九十度回転で右回りに並べられている。正確な刻みで回されている辺り、当人の几帳面な性格が、いかにも出ていることだった。

どこことなく多節鞭も思わせる破線の終わり、先端には蓮花型の髪留めを嵌めている。内側が白く、外縁に向かって桃色になっていく花卉。その中央から、小振りな筆先の如くなった翠の末髪（うすみ）が突き出ていることだ。

「おっと、俯（うつむ）くんじやないよう！ 小癩（こじや）なお顔が見えないじやないのさあつ！ その内、睨（にら）むなんて出来なくなるんだから、今の内に、たつぷりと目に焼き付けておいてあげるよう!!」

「っふ！」

戦術電算機からの警告音。周囲の肉溜まりからも、肉製の水鉄砲のような射出機がニョキッと飛び出し、バイオワイヤーを射出してくる。獲物の予測を外そうと、一回床面を打ち、跳ね上がり、命中の寸前に、ジュバツ！ と熊手状に先端を分裂させ、マハの顔面に殺到してきたことだ。つんと鼻腔を刺激する甘臭い粘液の匂い。視覚を犯されるような、極彩色の外皮と、その内部から淫らに咲く紅い肉。

水鉄砲の根元で捕らえられている生徒達に流れ弾が当たることを怖れて、マハは装置本体への反撃が出来ない。避けるしか無いのは覚悟の上である。腰を捻（ひね）った翠髪の特捜戦士は、軽いお辞儀から振り子の如く、母鳥が雛（ひな）を護（まも）る為に外敵へ躍（おど）り懸（か）かるような勢いで起き上がり、跳躍。既に狙われた位置には居ない。

「いいでショウ。貴女の悪行に引導、渡すマハの顔、篤^{トク}と拝んでおくといいデス！」
次のステップへと移りながら顔を向け、毅然^{きぜん}と敵を見据^すえることだ。

「健気なお顔だよう！ 本当は心細くって一人じゃ怖いのに、虚勢^{せう}を張っちゃってさあ！
心配しなくなつてアチキは人質^{にんしつ}なんか取らないよう！ 折角^{せつかく}捕^とまえた、大事な大事な地球^{ちきゅう}発祥人^{はつしやうじん}なんだからねええ！」

半月形の額、小鳥の跳歩^{しやうぽ}すら思わせる軽^{かる}やかな鼻梁^{びりやう}、烏瓜^{びんば}の紅い果実の如く輝く唇。整った造作が軽薄な誉め言葉を無言で拒絶し、懸念^{けんねん}を突かれても賢明な沈黙を貫くことだ。

左頬には目元から頤^いへとかけて、メヘンディ（ヘナの葉のペー^{トライバル}ストで肌に模様を描き、染める、タトゥーの一種。二週間程で薄れて消える）で民族的な魔除けの紋様を染めている。それは、ニームの樹が踊りくねるようなデザインで、鮮やかな濃いオレンジ色の線が、鋸^{きよし}歯状の葉を茂らせながら、二重湾曲^{ちやうにゅく}短刀の刃のような輪郭全体を浮かび上がらせていた。「ギューヒッ、一番ナリも年もちっさい奴が最後まで頑張つて、ハイジャック犯の腹いせで一番ひどい事をされちゃうんだよう？ 掴^{つか}んだら折れちまいそうな首してさあ！ 伸び盛りの身体にナニをされちまうんだろうねええ？ ギヒヒヒッ!!」

淫猥な視線を注がれるココア色の首筋には、スーツを着装する為の気密リングを嵌めている。鈍い金色のコブラが胴と尾を巻き付け、正面へと鎌首^{もた}を擡^{もた}げたようなデザインだ。華やかなイエローのフル・ボディスーツが、そこから手足の指先・爪先までを全て押し包み、少女の肢体が外敵に害されないよう密閉している。ラバーストッキングめいた伸縮性^{もつ}で以て、裸身に膜を張るかのようにびっちり吸い付き、発達途上の肉感を浮き彫りにするのだった。

仕事熱心なスキンスーツの上からは、武装の接続と直接防御^にを担う、上下に分かれたランガードレス風のマ^{（幻力）}ーヤー・ジャケットが被さっている。衣装の胸と両肩に、仄^ほ光る蓮華^{れんげ}型の鉱石を浮遊させながら、戦場には不似合いな程に可愛らしいピンクのカラーリングを惜しみなく披露していることだ。

それら、イエロー&ピンクの二層の衣装に彩られつつ、可憐^{ラニー}な少女は戦闘を継続する。

「こんなロリっ娘^にが、マン筋の浮き出るスーツをびっちりびっちりさせてるのは興奮するよう、興奮するよう！ その上、臍^{へい}出しドレスでめかし込んだじゃって、誘^{さそ}ってるのかよう！」

（平常心！）

侮辱^{はんぶく}に反駁^{はんぱく}したくなるのを、ぐっ、と堪^{こら}えて力を溜めていく四肢。そこに絡みつく、鮮烈なマスタード・イエロー^{（暗めの黄色）}のボディ・コスチュームは、なるほど、扇情的だった。そもそも、きついぐらいでなければ、戦闘スーツの役割は果たせない。ジャケットの上からでも目で想像できる程、小振りな乳房や臀部^{でん}が締め上げられ、身体の線が強調されている。インナーも兼ねている為、胸の乙女の果実などは形崩れ無しに根元から縊^{くび}り出され、双子の頂点を、ぷるん、と弾ませていた。太腿の付け根や腰付きの女性的な表情も、まるで凹版^{はくはん}画の原版の如く、くつきりと窪^{くぼ}み筋^{すじ}を際立たせていたのだった。

傍^{はた}目^めからはボディスーツの材質は、ざらりとしたタイツの繊維状に思える。しかしそれ

は様々な素材が複合的に組み合わせられているからで、内実は、各種のウイルスや有害な紫外線などを遮断する防護機能や調節機能を完備していた。

機能性と引き替えに少女の素肌にエロティックな仕打ちをしてしまっている気恥ずかしさを誤魔化すかのように、鼠蹊部から胸部にかけて、晴れやかなサフラン^(明るい黄色)・イエローのレオタードを被せたような防護層が重ねられ、その部分にだけ、やや厚みと光沢があるのだった。

「可愛い可愛い、やらしい服を、もつと間近で見せておくれよう！　ちょこまかと逃げ回るんじゃないよう！」

（平常心!!　次に捕マテ、無事に済む保証、無いデス!）

それら現代の鎧^{ガシビスン}下防護衣の上から絢爛な桃色の装いを着せている、戦闘機能の集約されたマージャー・ジャケットは、印度源流のランガードレス風で、上下に分かれた臍^{ベア・ミドリフ}出しスタイルだった。丈が胸下までの半袖装束と、ヒップスカーフ風の腰^{レンガ}穿きの組み合わせだ。ボディスーツとの間のゆとりが絞られたタイトな造りで、肢体の線に沿ったシルエツトが、薄い湯煙の漂う熱気の中を、すらりすらりと泳ぐように切っていく。

淡く脂肪の乗った、しなやかな舞踏者の肩背。ピンク・チョリの随伴者を従えながら、不気味な程に正確な敵の射出を間一髪で避けていく。地平線から昇ろうとしている双子の太陽のような微乳が、チョリの胸を緩やかに起伏させつつ、浅く息を弾ませる。そして、寸足らずの裾から零れる若い表面張力は、伏せたシンバルを盛り上げたような膨らみをインナー・コスチュームに更に寄せ上げられ、ぎゅっ、と詰め込まれた柔身を戦意に奮い立たせるのだった。強調された下乳の南半球が、チョリのピーチカラー・ヴェールから黄色^{ふもと}い麓^{ふもと}を覗かせ、女性の笑顔に咲く八重歯の如き快活さを、危機的状況に負けじと振り撒くことだ。

ランガードレスの途切れる胸下から臍^{ベア・ミドリフ}下にかけては、魅惑の空白地帯である。ボディスーツの細いお臍回りや括れた腰付きが、全て剥き出しになっているのだ。ネーブルの蠱惑的で縦長な窪みが、つん、と浮き、陶磁器を思わせる艶めかしく滑らかなウエストのラインを、バネを巻くかのように捻^{ねじ}らせていく。伸縮性のある檸檬^{れもん}色の生地がそこに吸い付き、すつ、と斜めに皺^{しわ}の線を走らせる様も美しい。

舞い腰を包む腰^{レンガ}穿きは、三角形のヒップスカーフを二枚、それぞれ腰の両側から巻き付けたかのような形状だった。開いた鳥の嘴^{くちばし}を下に向けたようなフォルムが、尖った裾を膝の両隣までびったりと降ろし、腰から太腿^{またも}にかけての丸んだ曲線に膨らんでいる。バイオワイヤーを躲し踊る少女^{ラニー}は膝を振り上げ、踵^{かかと}で床を打ち、爪先で回転しつつ上腿を横に跳び伸ばす。そうして羚羊^{かもしか}のような太腿でオープン・ビークのフォルムを押し広げ、上体に角度をつける度、ヒップスカーフ・レンガの前後にスコップ状に生じている開^{ひら}きから、肉付きの整った内腿や乙女の秘所をちらつかせていることだ。

排泄にしか用いたことの無い清廉で初な陰阜^もの盛りの、汗のムレを蒸発させてしまうような生命の熱気が、スーツ生地を一枚隔^{へだ}てただけで陵辱者の視線に晒されるのだった。

「御馳走を目の前にぶら下げられてえ、ペヂュランズユさんはあ、もう涎塗れさあ！
そういやあ、お前等の文化じゃあ、鬼ごっこをさせて異性の気を惹くんだっけねえ！」

調教魔の好色な笑みから逃れ、パッパッと振られて巧みに重心を移動させる手足は、聖蛇に呑み込まれていた。正確には、そこに着装しているピーチカラーの肘丈グローブと膝丈ブーツの縁が、聖蛇の口を模しているのである。そして、ナーガが乙女に差し出すのは、悪と戦う力だ。手首足首にリングを嵌めた大振りなりム・アクセサリ越しに、手首には羽衣を思わせるショール型の武装、足首には蓮葉に見立てた推進ユニットが接続されている。

「そーら！ 捕獲してあげるよう！ 暴圧兵装、ワームズ・グラップラー!!」
（隙有り！）

大振りな攻撃が来た。エイリアンの頭上で蝶々結びにされた二匹の巨大ワーム。その結びの末端——頭部が、数回、ジャブのような軽快さで突き下ろされてきたかと思うと、その次に重さが乗り、チョップング・ライト気味の強打へとシフトして撃ち下ろされてきたのだ。マハを丸呑みにせんと涎を散らすそれを前に、彼女がお腹の前で合掌するかなのような構えを取れば、自制されていた挙措が苛烈な夏の息吹を取り戻す。

ラジャスタンのカタックを源流とする、優雅で激しい戦闘舞踏。足腰を力一杯使って回転しながら舞台を跳ね回るような、ララーイー・ラーस्याだ。

「雌蛇の舞踏——」

バトルブーツの底に、黄色いネズミ花火の如きエネルギーの奔流が生じる。それによって、移動の邪魔をする、蚯蚓の侵蝕によって床に生まれた卑猥な肉溜まりを削りつつ、野太い「雨」の隙間を縫うように、ホバー走行じみた疾走で駆け抜けて行くことだ。

「ギャハハハハハッ！ 花びらが風に揉まれてキリキリ踊ってるよう！ 一思いに消し飛ばしてあげるよう！」

ワームが蝶々結びごと回転し、質量の嵐の中に少女を巻き込もうとすれば——、
「カルゴ・シヤニ・クード
雌兎の跳躍——っ！」

ジャツと彼女の脚が振り上げられ、蹲る野兎の如く背を丸めて後方宙返り。迫ってきたワームをボンッと、一回転した両脚でタイミングよく蹴りつける。そして、ブーツ裏のエネルギー流を爆ぜさせた。侵蝕能力を持つ相手に、うかつに接触など出来たものではない。防御も兼ねた爆風に乗り、鞆が打たれたかの如く、後方へと弾かれるマハだ。

（よしっ、間合い、取れました！）

膝で巧みに着地の衝撃を殺していると、負け惜しみが投げかけられてくる。

「ふふんっ、余裕の出来た所で周りを見てみよう！ あんなに気持ち良く撫でて貰ってるのに、何が不満なんだよう！ 文明だの道德観だの、出来損ないのお洋服は脱ぎ棄てて、ありのままのすっ裸におなりよう！」

「この胸の蓮折石に懸けて、そんなことは出来ません！」
ぐっ、と誇るように反らされた衣装の胸、儂乳の谷間から咲くかの如く浮遊し輝いてい

るのは、奇妙な鉱石だった。女性の肌のように艶めかしく、一つの石から削りだしたかのような、滑らかな蓮の花の形をしている。それは内側から光を発して燦めき、中心部へ向けてが白く、外側へ行くにつれてが淡い桃色を呈していた。根元の萼苞部は少女の谷間に収まり、そこから放射状に広がり重なる匙型の花弁が、乳頭を越えて大きく張り出している。底はお椀のように、つるりと丸い。

更に、蓮華の中央、本来なら花托のある位置からは、ヒマラヤの山々の峻険な頂きの如き尖端が突き出し、マンゴーの果肉で作ったシャーベットのようならついた表面で以て、濃密な鮮黄色に煌めいていることだ。

「泥中蓮生。この石は、辛い目に遭テも善く在ろうとしてきた人々の祈りの結晶。歴史に降り積もてきた人類の願いが、ついに物質化を果たした奇蹟の証！」

マハの言葉と意志に活性化を促され、石の光がゆったりと強弱を作る。あたかも、生きて鼓動を打っているかのようなであった。

ランガー・ジャケットの両肩の先にも一つずつ、拳大の蓮析石が浮遊していて、横斜め上方を向き発光しながら、時折くるりと回転している。

「マハ達は、この石と波長の合タ、託誓者（プラティギヤープトリー）。犯罪や理不尽と戦イ、人々の願いを実現させる使命があるのデス！」

「ギャツギャツギャツ！ 穴の付いてる雌の分際で、ご大層なことを抜かしてるよう！ 宇宙は弱肉強食の真つ暗闇だよ！ 柔い生物達の甘ったれたお願いなんて、とんだお笑い草なんだよう！ そんなひ弱さん達に居場所を作って保護してあげようってんじゃないかよう?!」

「たとえ宇宙が冷たく無慈悲で残酷の極みにアタとしてモ、たとえ異星や人の世が暴力的で悪意に満ち汚れ切テいたとしてモ、人間は清く尊く理性を失わずに生きていくのデス！」

有効射程を外れたグラップラー・ワームの代わりに、今度は両脇の砲袖が動き出す。

「虐蝕兵装、ワームズ・アーティラリー!! だいたい、そんな結晶が生まれちゃうくらい永い間、果たされてこなかった願いなんだろうよう！ 無駄なことはお止しよう！」

——ゴチャッ！——デュパン！

尊い願いを踏み躪るかのようには、粘りついた破裂音が轟いた。太細取り取りの蚯蚓を、何万匹も固めて作ったような生体砲弾が、卑汁の飛沫を散らして撃ち出されたのだ。

射出時に零れた欠片が花崗岩の床でベチャッと潰れ、散らばった蚯蚓達がゼリーに齧り付くかのように石材を咀嚼していく。そしてフレッシュピンクの肉を排泄し、その排泄肉が更にアメーバの如く周囲の素材を同化侵蝕して、見る間に辺りを卑猥に蠢く肉溜まりへと創り変えていった。如何なる防備をも無視し、電子機器の機能すら乗っ取るその脅威は、既に襲撃時に実証されている。

（速い……っ）

バレーボールを二回りは大きくしたような醜悪なくす玉が、決意に満ちた少女を崇高な

祈りの座から引き摺り下ろさんと、胸ぐら目掛けて飛び込んでくる。その全てが獲物の尿道への侵入を目論む、怪蚯蚓の群塊だ。直撃したならば、弾けた構成蟲らによって立ち所にコンバット・スーツを侵蝕され、褐色の素肌に奇怪な媚粘液を塗り込まれてしまうであろう。

「だとしても！」

顰めかけたばかりの尿道がチリチリと危険に戦き、全身の体毛が逆立つのを感じながら、マハは合掌の掌形を崩す。やや右半身になり、右腕を上へ滑らせた。華奢な体軀が淫辱の嵐に呑み込まれようとする寸前、左掌に右肘が付くまで昇らせて、蓮の茎の如き掌形を作り出す。

『蓮の湖面』、穢れぬ天布！

チョリの半袖の奥に理想的な腋窩を覗かせながら、健康的な肉付きの腕が、手刀形に揃えた指先を淫獄の湯気に突き立てる。すると、斬って捨てるように優雅にしなる細い手首の下で、澄み渡った湖面の如き光の帯が煌めいたことだ。

正体は、シヨールのように折り曲げ可能に造られた、薄型のソーラーパネルである。棚引く程に軽く、幅は拳三つ分程度。全長は優に少女の背丈の三倍を超え、身振りの激しい三点、手首、腰、足首とでジャケットと連結しながら、彼女の舞踏に光彩の華を添えている。

——ふあ、わ……つ、フ、オン！

稼働音と共に薄い陽色のプラナに包まれる。その構成は四肢に戯れつくかのようで、シンプルでスリムなランガードレスのラインに、複雑なうねりの表情を加えていた。

マーマー・ジャケット側のソーラー・シヨールとの連結箇所は、同時に舞姫のアクセサリーになって洒落つ気を出している。真鍮じみた合金製で、蓮の葉茎が絡まったデザイン、手首のカダ（バングル）、腰のカラドニー（金属ベルト）、足首のグングル・リング（小さな鈴の連なった、足首に巻く舞楽器ベルト。この場合は、ベルトではなく、リング状）だ。

カダとグングルは、手首足首を囲んで浮遊していて、そのリングの内側だけが重い油を満たしたような感触だ。少女が手足を動かすと、カダやグングルも追従してくるのだった。カラドニーは、ヒップスカーフ・レングの上縁に沿って嵌められていて、V字型の落ち込みでもって、スーツに浮いた縦長のお臍の美しさを引き立てている。中央のバックルは、マタパッティと同じく太陽のシンボルの形をしていた。それは、舞踏に磨かれた腰付きの、よく捻られくねり洗練されたフォルムが指し示す踊芸探究の気迫を受けて、燦然と輝いていることだ。

——イイイイ——ひゅっ、さん！

天女の羽衣にも似た長いシヨールは、それらの背面から覆い被さるようになっていた。そして、踵根の先まで踊り手の肢体に寄り添っていた。

まず、小さな肩の後ろでΩの字に大きく膨らんでから、両腕へ。螺旋の川の如く緩やか

に少女のか細い前膊^{ぜんはく}に巻き付き、鈴型のボールジョイント風コネクターでカダと繋がっている。しゃん、とベル・コネクターが作動音を鳴らす。それは、テニスボールサイズの鈴に、馬蹄^{ばてい}型のシヨール受けを付けた「〇」型の形状で、カダの手の甲側と手の平側とで一つずつ揺れていた。マハの腕とカダの断面を二重丸で表せば、「〇〇◎〇」となるだろう。

戦闘機動の中で、空気抵抗の風を受けて膨らむロング・シヨールは、レイル&ステーション・スタイル（一続きであるべき帯などに、途中で大きなリングなどを挿入し、あえて区切りをつけた物。この場合は、コネクターが挿入されている）。カダの甲側コネクターに繋がって途切れ、反対側のコネクターから、また伸びると、激しい腕振りをかいくぐる余裕を持った長さで「し」の字に垂れつつ、腰のカラドニーの両脇へ煌めく湖帯を引いている。

（出力設定……連続通プラーナ限界まで……いいえっ、気にしてる場合でナイですっ。全開デス！）

砲弾を睨み据える少女が、パータラの花の如く紅い下唇を噛みながら、掌形変化と並行してベリードダンスの要領で腰をふるりと振り回せば、それが自身の操気とシヨールのシステムへの命令となった。舞踏の動作がコマンドになる舞武一体の入力体系。舞姫にして特捜戦士たる彼女専用構築された難解な仕様を見事に手懐^{てなず}け、危地の演目に敢然^{かん}と挑む。

応諾するカラドニーの左右で揺さぶられるのは、ベル・コネクターが双受型になった物が、一つずつ。鈴一つにつき馬蹄型のシヨール受けが二つ接続され、キャンディーの包装紙のような「〇」型の構成を取っている。キャンディ・ベル・コネクター、通称、CB Cである。

そこからお尻の方へ伸びたソーラーシヨールは、軽快に帯を捻^{ひね}って下臀の輪郭を囲みつつ、細い脚の間でX字に交差し、互い違いになって足首へと伸びている。右腰から左足首へ、左腰から右足首へ。脹^{ふく}ら脛^{はざ}の辺りでふんわりと膨らみながら、次の行動に備えて爪先立ちになっている脛^{けん}の辺りで、グングルの小鈴達の中に一つだけ混ざっているテニスボールサイズのCB Cと繋がっていた。

磨き抜かれた鏡の如く燦めく帯状パネルの河流の締め括^{くく}りは、三十センチ程の引き裾である。元より少女の軽^{かろ}やかな運歩で裾が地に引き摺られることはないが、それは三次元・宇宙空間での運用を見越した装備であった。船内活動用に、鏃^{やじり}型の対床壁反発機によって先端を包まれている。

ソーラー・シヨールのセルは、現在もエネルギーを吸収していた。ランガー・ジャケツトに力を送っている連結部からは、時折ちりちりと余剰出力の光が零れている。蓮析石の力によって、暗黒の宇宙に産まれた光という光は増幅され、マハ・アディーニの力となるのだ。

「蓮は穢れを寄せ付けない――、泥中蓮生、浄来蓮咲――」

今、蓮茎の掌形によって右腰から右手首までゆったりと張られた光子増幅変換モジュ

ル『蓮の湖面』に、太陽の如き黄光が満ちた。胸の蓮析石から清浄な霊力がマハに流れ込み、彼女のチャクラを介して、暖かく晴れやかながらも悪を晒したなら立ち所に焼却してしまいうような正義のプラーナへと変化、パネルの湖面を伝わって燦然と輝いたのだ。

ズシリと重い肉塊の砲弾を、ふわりと撓たわんだシヨールが受け止める。

パーヴァク・テージャス
「浄滅昇華！」

そして、マハが手刀を窄すばめて蓮蕾を模し、そこから指を開いて開花を形容する。すると、接触点から灼烈なプラーナが蓮華が咲くかの如く噴き広がり、肉塊砲弾を包み込んだことだった。質量任せに突っ切られるより早く、不可思議な心地良さを持つ光の波長へと急速変換、吸収、力強さを増していく。

「効率の悪いエネルギー吸収方法だよう！ そんなんでアチキの乱れ撃ちは捌さばけないよう！ ギャッフウ！ ギャッフフツツ！」

砲袖は二門ある。片側が反動で浮き上がった隙を埋めようと、もう片側が追撃してくる。それに対し、ピーチカラーのナーギン・ブーツが目紛めまぐるしく交錯した。少女の身体がエイリアンを中心に円軌道を描き、投じられた水切りの石の如く跳ね回りながら、隙を窺い始めることだ。

デージ・ケークラー
「蟹の速歩——」

基本は高速。しかし、やがて速度の緩急によるフェイントが混ざり出し、更には、手で地形の突起を掴んで行う立体方向へのアクロバティックで急激な方向転換が加わった。壁際に並んだシャワー・ユニット、お喋りな小鳥達の止まり木として浴場の各所に散在する腰掛け岩や無憂樹の麓のテーブル。小規模なガーデンングの行われているパーゴラや木を伝い、飛び上がり、天井から下がるシャンデリアや、その隣を走るケール、換気口へと、ピンクのバトルグローブを伸ばしていく。そこに踊り手が差し掛かった次の瞬間には、全くあらぬ方向に姿があるのだった。

ハヌマント・ヴァン
「猿将の森に舞う——！」

映画のフィルムをコマを飛ばして見せられているような物だ。しかも、その曲芸体術には、観客の予測を裏切ろうという熱意がある。これでは飛び道具の狙いを付けることは難しく、只でさえ鈍重で手数少ない砲撃は、幾ら撃ち出されようと完全に回避されてもおかしうはなかった。

それで相手が攻撃を控え、防御一辺倒に回るのなら、それでも良し。ブーツ裏のエネルギー流はステップのついでにネズミ花火のモップで肉溜まりを拭き削り、敵の陣地と化しているミニ・トーチカを邪魔つけない力場ごと蹴り碎いてジャンプの踏み台にする。そうやって相手方の戦略的な空間占有率を押し下げ、次なる猛攻の下準備を進めていけばいい。だがしかし——。

「ギャッツホオオオイ！！ 凄い、凄い！ 踊り子さんに触るのは、一苦労だあねえ！！」

「くっ！！」

ペヂュランズは自分の位置にどつしりと構え、身をスピンさせながら応射。

巧みな、を通り越して異常な程に正確な偏差射撃で対決してくる。

マハからしてみれば、その狙いの付け方は――、

（まるで、先回りされてイるみたい……っ）
なのだ。

進路上にあらはじめ砲弾を置かれていて、そこに自分からぶつかりに行ってしまったようにすら感じる。躲しても躲しても立ち塞がつてくる飛来物の壁であった。

（ダタラ――、札、冷却中でも切るしかないデス……！）

空気抵抗の風に揉まれソーラーシヨールをはためかせる褐色の少女は、大粒の弾雨を前に両腕を掲げ、天を掻き混ぜるかにように幾度も交差させた。

「善には果報、悪には因果、為されぬならば世を正し、天則に代わって法を敷く――」

孔雀が飾り羽を打ち振るかのような鮮やかな変化を見せる手首。そこから孔雀の首の如くピンツと伸ばされた背筋へかけての、羽衣の膨らみに当たる部分には、ずらりと金属製のハスの花が浮遊していた。その花びらの一枚一枚は、チャクラムが八分割された、待機状態の構成刃だ。

「唸れ、『苛烈なる砂礫の戦輪』――っ！」

するりと浮き上がった欠片達が連結し、無数の戦輪と化す。サイコネシスに回転を与えられ、思念の糸に振り回され、マハを中心とした一つの天体となっていく。様々な円軌道で防衛線を敷くそれらは、土星の環が幾重、幾角度にも連ねられたかのようにであった。

「切り裂けっ、千弁刃っっ!!」

瞬間、飛来していた肉塊砲弾の姿が、シュレッダーにかけられたかの如く掻き消えた。

左右から飛び出したチャクラム達が、聖域に踏み入ってきた侵犯者を粉微塵に斬り刻み尽くしたのだ。プラーナの黄電を纏った白銀の砂嵐に、次々と撃ち込まれるバイオ・シエル。その全てが消滅させられていく。

「畏れなさい！ 其は、怒れる太陽の灼死の舞踏――っ、円刃よ、乾いた嵐とナレ、渴き餓えた猛き砂群へとっ!!」

「ギシーシ、好きだけ踊りなよう！ ちゃあんと隅々まで見てあげようっ！」

あたかも、二つの天体が相争うような構図となった。太陽系に喩えるならば、『夏陽の舞姫（サオールエ・ナティラーニー）』を差し置いて太陽の位置に陣取ったペヂュランズユと、その周りを土星の如きミドルレンジで疾駆するマハ・アディーニ。異星人から撃ち出される肉の隕石と、特捜戦士を守護するチャクラムのサターンリングとが、壮絶な勢力圏争いを始めることだ。

「いいよ、いいよお、アチキと一緒に遊ぼうねええっ！」

「くう――ッッ！」

本当は、悠長に時間をかけるつもりなど無かった。こうして戦っている間にも、女学生達は蹂躪され続けているのだ。早くこの敵を制圧して、救助せねばならない。マハの常の必勝戦法では、相手の攻撃は回避と『蓮の湖面』であしらい、護りに回すチャクラムは最

小限。残り全てのチャクラムを攻撃に注ぎ込み、果敢に手傷を負わせて弱らせてから、体勢の崩れた所を一気呵成に攻め立てて討ち果たすのだった。制圧速度には自信があるのだ。(……なのに——っ)

手数でも防御方法でも圧倒的に勝っている筈の彼女の顔には、焦慮が見える。

(ヤパリ、砲弾との接触時、思念の届き、悪くナル……っ)

動きを先読みされているだけでなく、念動力で操っているチャクラムに、異常な手応えがあった。砲弾を斬り刻む際に、まるで鉛なまりを通すかのように、思念の通りが悪くなるのだ。コントロールが乱れれば、同時に、チャクラムの纏うプラーナも薄くなる。すなわち、砲弾を斬り裂く際に逆に怪蚯蚓からの侵蝕を受けてしまうことになる。それを防ぐ為、普段よりも一つ一つの操作への集中力を高め、込めるプラーナも増しているのだが、手数の多さが仇あだとなり、それだけで手一杯となってしまうているのだった。

三日三晩も戦闘が長引いてしまっている、その一因だ。

(別の思念が満ちてイる？ でも、あの敵の思念なら、本人から距離が離れた状態でどうも干渉が強くなるのはおかしい——まさか砲弾の蚯蚓の思念デス……っ?)

原因を考え込んでいる余裕は無かった。

「どうしたよう！ 大口叩いてそれかよう！」

(押し込まれルっ！)

汚穢おわいな欲望に充ち満ちた肉塊が、戦輪の不調をいいことに少女の懐ふところへ目掛けて、ぐいぐい、と勢力を食い込ませてくる。その血行の良いコア色の生肌きはだを凌辱せん、と。男根的で旺盛な挿入意欲は、それを阻はばもうとする武装に対しても遺憾いかん無く発揮され、黄陽光の薄い所を突いて取り付き、立ち所に侵蝕してくるのだった。

白銀の戦輪の縁が怪蚯蚓の体液である紅色に染まったかと思うと、みるみるその色が広がる。全てが染まり切った頃には、繊毛蠱く肉製のリングと化している。途端、主からのコントロールを失って、グジャツと床に落ち、回転の名残なごりで少し転がろうとしながら、見る間に形を崩していくことだ。

そうなる前に、すぐに汚染された部位を廃棄して別の構成刃と組み合わせるのだが、その立て直しに掛かるタイムロスですます被害が増していく。

(この敵、何かが噛み合わないっ、不気味デス——!!)

チャクラムを攻撃に回す余裕が全く無いなどと、初めての経験だった。

「ギャハッ！ ギャハハハハッ!! 駄目押しでしょう！ ワームズ・アーティラリー、過剰出力駆動!!」

それまで一門ずつ撃っていた砲袖を、腰撓ために二門構え、異星人が自転する。楓型かえでの砲袖の葉脈に当たる部分が発光し、脈打ち、全方位へ通常出力とは比較にならない程の短間隔での生体砲撃が卑汁を噴いた。一見無秩序にばらまかれたそれらは、恐るべき事に全てマハへの直撃コースを取っている。

捌き切れない、と、戦慄の直感が脳裏を走る。

（札っ、もう一枚……っ！）

『天駆ける蓮葉（ウランクー・ナリニーパッティー）』、待機モード解除——！』

ヒップスカーフ・レンガのお尻を押し上げる、小振りな二顆のマンガ。ピンクの生地に澁刺とした丸みを描く双子の尻球が、衣装の中央を凹ませている縦谷の底を深くし、横跳びする脚が独特の調子で強く壁面を打った。すると、蹀近く、両グングルの外側に浮遊していた脚部推進ユニットに火が灯ったことだ。

への字型に外方向へ湾曲した翠板。そんな、少女の太腿程の長さで幅の物体が、横に倒れ、放射状に割れ、その間に草色の光の膜を張る。

ふわり、と、風を切る四肢が浮き上がった。推力に押し上げられて。

「鳴らせ、天駆ける蓮葉の楽曲——」

それはソーラーセイル。完全展開された推進ユニットは、扇の骨とも、魚の胸鰭の鰭条ともつかぬフレームが放射状に広がり、フレーム間には、光子の衝突を受けて運動量を得る力場を発生させている。足首の両側に緑色の煌扇が開いている様は、あたかも、空中に浮かんだ蓮の葉の中央に少女が立っているかのようだ。

余剰出力を排出する為に、グングルの小鈴達がシャンシャンと無数に澄んだ音を奏で出す。

「讃えよ、天界の花の雨——、華美なる妙なる空中舞踏——」

宙返りしながら小刻みな舞踏のステップを踏む華麗な少女の、脚の筋肉の電気信号を読み取り、足首の細やかな動きに反応し、あるいは、お臍への力の入れ具合などから操作を受けて、鰭条部が生きているかの如く角度を変える。波打ったソーラーセイルは絶妙の加減で人体由来の物とは異質なベクトルを与えてきて、運動量が唐突に逆方向に切り替わるような、フレキシブルで鋭角的な変幻機動を達成させることだ。

新たな足場を得たことに加え、ランガー・ジャケットの残像機能も発動し——、

「天女の花吹雪（アプサラス・パンカリー・ヴァルシャー）!!」

あたかも、空間一杯に舞う花吹雪の一枚一枚が、マハの姿となっているかのようだった。今、少女が右回りなのか左回りなのか、上に跳んでいるのか下に落ちているのかも分からなくなる。最早、視覚で追うことは困難を極めた。

しかし、この底知れないエイリアンが相手の場合、それでは飽和攻撃に屈するまでの時間を延ばすだけなのだ。

「まだデス！ セイル反転、プラーナ圧縮——、一切清浄、悪根浄滅——っ」

マハは、ソーラーセイルの作用方向を反転。同時に右脚を左に振り、股関節を滑らかに回しながら、自分から見て時計回りの円で眼前を薙ぎ払う。すなわち、渾身のプラーナを込めて、頭にまで上がった必殺の内回し蹴りを放ったことだ。魅惑的に伸ばされた脚が、刹那の雷光となって閃き、鋭気活潑な威力を炸裂させる。

「——蹴り裂けっ、蓮刀足っつ!!」

大浴場に討滅の花火が咲いた。砲弾が足刀で叩き割られ、弾け散った蚯蚓達がプラーナ

の灼光に浄滅昇華されていく。

「シイイイイツヤ!!」

更には軸足がスイッチして、もう片方の脚が跳ね上がる。それを繰り返し、宙を翔る自分自身がチャクラムと化したかのように、連続蹴撃の猛攻で辱意の塊を駆逐していくマハだ。

「蹴足の花満ちるが如く——つつ!!」

だが、そこまでしても——。

ぱつと見の相性から考えれば、マハに軍配が上がる筈であるにも関わらず——。

まだ、足りなかった。

避けられない。迎撃するしか無い。押し返す余裕も、翻弄し返す目も見えてこない。

もしもペデュランズユが、女学生達を狙って砲撃をしてきていたならば、マハは自分から庇いに行ってしまうって現在と同じ苦境に立たされていたことだろう。だが、そんなことをされるまでもなかった。それどころか、寧ろ女学生達のいない場所でマハに命中するよう計算している気配までもがある。

「ギシッ、健気なあんよで幾ら薙ぎ払ったって、後から後から追加だよ!」

まるで熟練の監督に新人選手が千本ノックを受けているかのようだ。戦局を支配されてしまっていた。空中舞踏を踊っているとしても、それは相手の作った舞台の上で、こちらの対応出来るギリギリの限界を狙って攻撃されているとすら感じてしまうのだ。

（何故——っ?!）

「どうしたよう! もうネタ切れかよう! いっそ、【考案中のくくる奴でもやって（現在未定）】、アチキの総量を超えてみせるよう!」

それは誰にも話していない、マハが頭の中で構想だけしている段階の、新必殺技のアイデアだった。

（ヤパリ、こいつ——っ!!）

思考を掻き回すキンキンざらざらとした声音が、漸く秘密を明かせる喜びに調子づく。

「ギシヤシヤシヤッ! 今頃気がついたのかい? お前等の勢力圏には精神感應種はいないのかい? そうだよ、そうだよ、このペデュランズユ様の前じゃあ、お前の考えなんてダダ漏れなんだよう!」

「テレパス!」

横殴りの弾雨を懸命に捌きつつ、マハ・アディーニは改めて相手を観察した。

巨大な浮遊塊の頂点から上半身を生やした、異星の美女。彼女がアルビノめいた白い裸体を、嘲弄の愉悅にくねらせているのを。

「はいはい、改めて名乗ってあげるよう! アチキは、虚空渡る蠕淫蟲のペデュランズユ! ガーズヴェフラー帝国第一親衛艦隊ロイヤル・バタリオン構成士官、単独艦隊『ワンマン・コンクアラーズ』様さあ! 可愛い可愛い地球発祥人種達を品種改良しに、はるばる未開の宙域にまで出向いてあげたんだよ! 歓迎しておくれよう!」

笑うことしか知らなそうな、いかにもなネアカの気配。

だが、言葉の内容も行動も極めて暴虐だ。

性別は、おそらく女性。

容姿は、地球発祥人の目から見ても、きつい顔立ちの美人ということになるのだろうか。「ギュフフツ、嬉しいことを思ってくれるよう！　こんなアチキに尿道を委ねたくなってきたかい？　性調育される気になってきたかい？　遠慮しなくっていいんだよ！　可愛い娘なら何人だってウェルカムなんだよう！」

最早、精神接触能力を隠そうともせずに、マハの思考に対して応えを返してくることだ。「たっぷり焦燥感は味わわせて貰ったからねえ！　今度は絶望感を味わわせておくれよう！　怖かったら、ごめんなさい、するんだよ？　させて貰える内に謝っておかないと、後がおっかなああいことになるんだよおおう？」

白目という物の無い、血色のレッドスピネル（赤尖晶石）を嵌め込んだかのような瞳がマハを映し込み、先の尖ったアーモンド型の水晶構造をキラキラと不吉に輝かせる。大きく裂けた口は三日月のようで、獰猛な笑みから零れる歯は何でも噛み千切れそうなギザギザの鯨歯^{さめば}。喋る際に時折伸ばされる舌は紅く、とても長い。

地球発祥人類とは全く系統の違う進化を遂げた頭髪は、奇怪かつ美麗だ。濡れ落ち葉が積み重なったかのような形状の、茶褐色の髪。ミディアム程度の長さのそれは、それぞれ濃淡や明暗があり、茶系統の絵の具を全て塗りつけてもしたようである。雨上がりの森の絨毯を思わせる幻想的な異星の美を醸^{かも}し出していた。また、額から茶色い茎が左斜め前に傾いて生えており、その先端で揺れる、とりわけ大きなハート型の枯れ葉が、左眼を覆い隠すようにかかっている。

耳は長く、先端が白から褐色に変わり、落ち葉の縁の如くギザギザとしていた。

「ギャヒヒヒッッ！　マハちゃんに覚えさせる最初の芸は、それに決めたよう！　どのみち、お前等の言う愛も希望も宇宙には存在しないよう！　現実を見るんだよ！　今、『ごめんなさい』をしたら、この自慢の乳房で優あしく殺してあげるよう！」

【以下、ペヂュの身体描写へ】